

コミュニケーションにおける身体性の体感～日本語コミュニケーション教育メソッド

豊橋技術科学大学 ○中森康之

1. はじめに

新卒採用者に求められる能力として、「コミュニケーション能力」が常に一位に挙げられていることはよく知られているが、ここ数年、「コミュニケーション能力」と並んで「主体性」や「行動力」が急上昇していることを、昨年筆者は指摘した¹⁾。そしてこれらの能力が、高専卒生に特に不足していると指摘されていることも紹介し、次のように分析した。

これは求められている「コミュニケーション能力」の質の変化を意味している。従来は「スキルとしてのコミュニケーション能力」が求められていたが、ここ数年はその前提となる、「コミュニケーション意欲」とでもいうべき、積極的・主体的に他者と関わろうとする意欲そのものが深刻な問題となっていると考えられるのである。これは普段学生と接している私たちの実感ともよく合うのではないだろうか。だとすれば、高専～技科大においてコミュニケーション教育を考えると、単にスキルだけではなく、「主体性」や「行動力」などを含んだ、他者と関わる能力の総体としての「コミュニケーション能力」を考えなければならない。(181頁)

また筆者の予想通り、「主体性」や「行動力」は、さらにポイントを上げた。2011年1月18日に日本経済団体連合会が報告した「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果」における、「大学生の採用にあたって重視する素質・態度・知識・能力」では、終に「主体性」が4.6/5ポイントと、僅かながら「コミュニケーション能力」(4.5ポイント)を上回って一位となったのである。「実行力」も4.5ポイントでそれに並んでいる。さらに同調査では、大学生に不足している「素質・態度」として「主体性」を、「知識・能力」として「創造力」を第一位にあげている。

本発表は、上記のような問題意識に基づいたコミュニケーション教育メソッドの紹介である。この取り組みは、平成19年度から開始した豊橋技術科学大学高専連携教育研究プロジェクトの一環でもある²⁾。

2. メソッドの目的

コミュニケーション能力には様々な側面があるが、今回の取り組みは、スキルやノウハウに関するものではない。先に述べた、「他者と関わる能力の総体としてのコミュニケーション能力」の土壌となるべき能力の養成を目指したものである。

ところで、それには小さい成功体験を重ねること

が非常に有効であると筆者は考えている。コミュニケーションにおける小さい成功体験とは、自分の言葉(思い)が他者に共感されたと感じる経験である。その快感を積み重ねることによって、「他者と関わりたい」という欲望が増すからである。

そのように考えて、「朝の挨拶20秒プレゼン」など、これまでいくつかのメソッドを紹介してきた³⁾。今回紹介するのは、その次の段階のものである。それは「声の身体性」を体感するメソッドである。

声には身体性があり、「体を切り裂くような声」もあれば、「相手を優しく包み込むような声」もあるし、「相手の身体を硬直させる声」もある。その「感度」を上げることが、非常に重要なのである。「声」は単なる音の出力ではなく、自分の思いや考えを相手に届けるためのものであり、共感の土台となるものだからである。そのことを体感してもらい、コミュニケーションにおける身体性に対する「感度」を上げようというのが、このメソッドの目的である。

3. 声を身体で感じるメソッドの実践

3.1 学生への説明

声の身体性の重要性を早くから説き、その体得のためのレッスンを実践してきた竹内敏晴は、例えば次のような図⁴⁾で声の身体性を説明している。

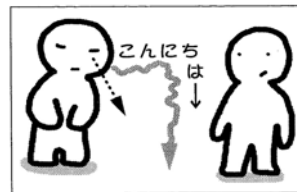


図1-1

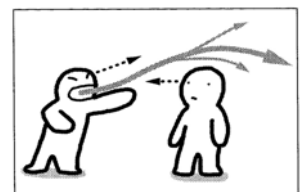


図1-2



図1-3

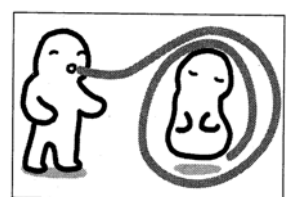


図1-4

最初に図1-1～1-4などを用いて説明をすると、頭では理解できるが、実感が湧かないという学生も多い。しかし、例えば、「自分の子どもが道路に飛び出しそうになった時に『あぶない』と叫ぶお母さんは、子どもの体をその声で硬直させる発声をするでしょ？」などという説明を重ねると、徐々に実感が湧くようである。その上で、実際にこれを体感させる。

【連絡先】〒441-8580 豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1-1 豊橋技術科学大学 総合教育院

中森康之 TEL:0532-44-6945 FAX:0532-44-6947 e-mail:nakamori@las.tut.ac.jp

【キーワード】コミュニケーション能力, 身体性, 声,

3.2 【メソッド1】私を深く受け止めて

まずは自分の話が深く受け止められているという体験をさせる。

- ① 2人組になり向かい合う。
- ② 話し手は、自分の好きなことを熱く語る。
- ③ 聞き手は、何度も心をこめて頷きながら聞く。

3.3 【メソッド2】心をこめて「こんにちは！」

- ① 2人組になって向かい合う。
- ② 心を込めて「こんにちは」と言う。
- ③ 心で別の事を考えながら「こんにちは」と言う。

3.4 【メソッド3】「こんにちは」はどこへ行く？

「声の通り道」を体感するメソッドである。

- ① 2人組になり向かい合う。
- ② 図1-1、1-2をイメージしながら「こんにちは」という。図2-1のように指をさしながらよい。



図2-1



図2-2

3.5 【メソッド4】私を包んで～

- ① 2人組になり向かい合う。
- ② 図1-3、1-4をイメージしながら、「こんにちは」という。

3.6 【メソッド5】私に呼びかけて（2人）

- ① 図2-2のように3人組になる。
- ② 呼びかけ人は、どちらかの人に呼びかける。
- ③ 呼びかけられたと感じた人は手を挙げる。

3.7 【メソッド6】私に呼びかけて（7～8人）

【メソッド5】の呼びかけられる人数を増やしたバージョンである。

- ① 7～8人が教室中に広がって、後ろ向きに、ランダムに座る。
- ② その中の1人に呼びかける（「こんにちは」など）。
- ③ 呼びかけられたと感じた人は手を挙げる。

これは非常に難易度の高いメソッドである。口頭発表ではこの様子を動画で報告する予定である。

3.8 【メソッド7】ボイストレーニング

一般的な発声練習、ボイストレーニングを行う。

4. 成果

楽しみながら身体の「感度」が上がり、身体性への認識も深まった。また、クラスが元気で明るく開放的にもなった。2010年度の【メソッド6】と【メソッド7】に対する学生の感想は下記の如くである。

- ・「話す」と「話しかける」というのは言葉は似ていても、実際は全然違うものなのだと感じた。
- ・（自分の）感度は少しだけ良くなった気がする。みんなの感度は明らかに良くなっていった。
- ・（声が）今向こうの方へ行ったな、などと大体の感覚がつかめるようになった。
- ・先週よりも、はるかに感度が高くなったと思う。

- ・発声練習の後は、自分も他の人も「音量は出ているが声が抜けてしまう」ということがなくなった。
- ・発声練習の授業はとてもよくて、その後のみんなの声がけっこうよくなったと思う。

【メソッド6】は、やる前には、「呼びかけられたのが分かるはずがない」という学生が例年は3分の2程度いるが、2010年度はその前段階のメソッドを実施していたので、「ありえない」と答えたのは15人中2人だけで、他は「練習すればできるかも」と答えた。この点からも、身体性への感度と認識が確実に上がったことが分かる。もちろん実際やってみても、多くの学生は、数度の練習で自分が呼びかけられていることが分かるようになった。

また、翌週も実施したところ、「先週より自分の感度が上がった」が9人、「同じくらい」が3人であり、慣れれば確実に実感できることが分かる。

また、【メソッド7】は、1回しか実施しなかったが、その効果は非常に大きかった。ただし自分でその効果を実感したと答えたのは、16人中7人、他人には効果があったと感じたのは、9人であり、自分自身については実感しにくいようである。それでも半数近くが1回のトレーニングで実感できたことは大きいと考える。参考までに2011年度の授業アンケートは、4.7/5点であった。

5. 今後の展開

本取り組みは、他者と関わろうとする意欲を向上させるコミュニケーション教育、動ける身体を作れるコミュニケーション教育の構築を目指したものである。もちろんそれはコミュニケーション教育全体の基礎的な一部に過ぎない。しかし非常に重要な土台となる部分である。今後は、プロジェクトメンバーと協力しながら、技術者教育においてより有効なコミュニケーション教育を構築し、そのメソッドの共有化を図りたいと考えている。

脚注

- 注1) 中森康之：「逆説の教育～「現場」が育てる「人間力」あるいはキャリア教育～」、「平成22年度高等教育講演論文集」, 国立高専機構, pp. 181-184 (2010)
- 注2) 平成22年度は、「技術者教育における日本語コミュニケーション能力向上メソッドの開発とデータベース化」。メンバーは、中森、焼山廣志（有明）、畑村学（宇部）、井上次夫（小山）、柴田美由紀（同）、鍵本有理（奈良）。平成23年度も新たに天造秀樹（香川）・坪井泰士（阿南）・山田昌尚（釧路）を加えて申請中。
- 注3) 焼山廣志・中森康之：「高専から高専専攻科・大学に継続する日本語コミュニケーション教育に向けたプログラムの開発」, 「平成平成20年度高等教育講演論文集」, 国立高専機構, pp. 367-370 (2008)
- 注4) 『声が生まれる 聞く力・話す力』, 中公新書, pp. 151-152 (2007)